
第2章 二話 荒野の絆

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第2章 二話 荒野の絆

【Nコード】

N9950X

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

その星の西の果てにはウエストホースと言われた荒野があった。ならず者が集まり保安所の連中は手を妬いていた。

任務開始（前書き）

レオ・バレツタは二丁拳銃を持つ孤高の保安官だった。ある日、酒場で賞金首ボスコを捕らえた。

次の日、就任した新しい保安官、投げ縄と格闘の使い手ピートに出会う。帰りがけレオと虎のチャンクは盗賊団に襲われ、ボスコを釈放しろと迫られる。ギリギリの所で魔法使いのクノイチ、剣 美里に助けられる。

世界各地で暴動を起こしている仮面邪教僧と繋がっている盗賊団とは何者なのか？

数多の謎を抱えながら彼らの任務は始まった。

任務開始

次の日は雨だった。

ため息をつくレオ・バレッタ。

「ハアー。雨か。雨の日は照準が定まらないんだよなー。初日からコレか?」「おはようございます。先輩。雨ですね」「まあアタイは構わないんだけどね。アンタラは乗り気じゃないんだろ?」「できれば避けたいな。どうだ?ピート」「そうしましょうよ。ミサトさん」「マアね。アタイ一人でも構わないんだがね。少し出かけて来ようかね。アンタラはここに居るんだろ?」「アア。無茶はするなよ。ミサト」「知ってるかい?レオ・バレッタ。人はね多少なりともリスクを背負ってんだ。無茶はするさ」

雨の中、剣 美里は外に出た。

「凄いですね。あの人は。任務の為に自分を犠牲にしている。僕はそう分析しました」「かもな。それがアイツの仕事なんだろ?クノイチなんてそんなもんさ」「レオさんは?」「俺か?無事に帰ってこれりゃそれで良い。金より命だ。賞金首なら腐るほどいるしな」「もっともな意見ですね。僕は先輩方が無事ならそれで良い。縄使

いなんてそんなもんですよ」「……………悲しい性だな。俺に気を使わなくて良い。好きにやれ」「アノ……………レオさん。今までチームを組んだ事は……………」「聞くな！ピート。二度と聞くな！」「……………すいません……………」「ピートはビックリして謝った。

ミサトは情報収集で酒場に行った。

掲示板を見ながら腰に手を当てる。

「相変わらず賞金首が多いな。この中で例の盗賊団と関係があるのは……………」「オイねーちゃん。盗賊団を探してるのかい？」酒場のマスターが話しかけた。「アア。そうさ。マスター。何か知らないかねー？」「知ってるっちゃー知ってるがね。普通に近づいてもアブクになるだけだよ。やるなら潜入だね。ねーちゃん変装は？」「アタシャー、クノイチだよ。変装位お手のもんさ」「なら、ここに行ってみな。今、地図出すから、待ってな。オラーな、酒場のマスター兼情報屋なんだ。情報じゃ食えねえから酒場に居るだけだな」「ありがとよ。手間賃は保安所に請求してくれ」「要らねえよ。出世払いだ。アンタも……………あれだ。女の出世は結婚だからな。はえーとこ足洗えよ」「余計なお世話だよ。情報屋」ミサトはニコツと笑った。「アイヨ。ここだ。気をつけろよ。お嬢さん」「アタイには、似合わない言い方だね。お嬢さんなんて」ミサトは一枚の紙を受け取り、酒場を後にした。

行きがけにレオとピートに会いに行く。

「今、帰ったよ」「どうだ？何か掴めたか」「アア。アンタラに頼みたい事がある。明日、ここへ行きたいんだ」「盗賊団のアジトか？でかしたぞ。ミサト」「アタイが潜る。ただアンタラはその手前でいざこざを起こして欲しいんだ。で、連中がアタイを保護する。中の情報はアタイが流すから」「つまり……ミサトさんが囷に？大丈夫？」ピートはレオを見た。「確かに。リスクが高い。中の様子も解らない状況だ。戦力も。昨日の連中が全てとはい切り切れんな」「……連中を炙り出す作戦は？で、手薄になった所をミサトさんに任せる。どうです？レオさん」「……いずれにしても衝突は避けられないか。ピートの案が無難だな」

「オウ。暇か？お前たち。昨日の盗賊団が、早速動いたぞ。ボスコの身柄を明日迄に渡せだ」とよ」ボスが部屋に入って来た。「やりましょう。ボス。奴の釈放を」「なんだと！」「まあまあ。俺達に考えがありますから。無駄に手渡す訳にはいきませんから」「……なんだ？考えて」「良いですか？ボスコは危険な目に逢ってでも取り戻したい。それには何か理由があるはず。奴が吐かないなら、乗るまでです」「……わかった。護衛は付けてやるよ。上がうるさくてな。引き渡し場所は何処が良い？」「連中のアジトの近く。」

かつ見渡せる場所。俺とピートがボスコを引き連れて行く。ミサトは隙を見て変装して潜入する。どうだ?」「さすが先輩。異論はありません」「アタイもだよ」「ミサト。生きて帰って来い。任務は以上だ」「そうです。本編は帰ってからですから」「ミサト君。済まん。就任早々、無茶をさせて……………」「フン。わかったよ。連中の戦力やら、必要な情報を盗んだらずらかるさ」

続く

荒野の絆 その2

牢屋に捕らわれた男。ボスコ。明日彼を連行する。

「オイ、囚人！釈放だ！出ろ！」「意外と早かったな。で、誰なんだ？俺を釈放させたのは？」「盗賊団だ。知ってるだろ？」「……：イイヤ。名前は？」「スモーキーガンナーとか言ってたな。知ってるだろ？」「……スモーキー？……知らんなー。聞いた事もねーや」「惚けた奴だ。明日会うんだろ？」

次の日の話しだった。

「さて、俺は知ってるな。こいつはピート。お前を引き渡しに行く。ついてこい」「……あのよー。昨日、警備に聞いたんだが。俺を引き取る奴だが……知らんのだ」「知らない？貴方は組織の人間では？」ピートがボスコに聞いた。「イイヤ。単独で行動する、盗賊だが。大体にして俺ら盗賊は群れるのが嫌いなんだ。盗賊団なんて盗賊の端くれにも満たない野郎共だぜ」「レオさん。なら、何故彼を釈放しろと？」「ピート。盗賊には2つのタイプがいる。ボスコの様に孤高の盗賊もいるが、そうゆう輩を利用したい奴等もいる。裏金が動くケースもある」「なるほど。今回はそのモデルケースですね」「こいつが嘘についてなければな」

ピートはボスコの顔を見た。

「さて、時間にはちと早かったかな？ どうだ？ ボスコ。少し休もうか？」 「なあ、レオ。連中の狙いは本当に俺か？ 随分と警備を付けているみたいだが。手薄になった場所は無いのか？」 「とにかく、アンタを指名してるんだ。今の所はな」 「……………彼らの狙いが他にあるとしたら……………」 「ピート。余計な事は考えるな。今はボスコの護衛に集中するんだ」

林の奥から馬に乗ったフードの男がゆっくりと走って来た。

「随分と早いですね。保安所の方々は」 「アンタが盗賊団か？」 「スモークーガンナー。貴方を保釈する組織の人間ですよ。ボスコさん。さあ渡して貰いましょうか？」 「レオ・バレッタは隠れてついてきた警備をチラッと見る。伸ばせて合図を送る。」「ホウ。アンタがスモークーガンナーか。覚えておこう。ボスコをどうするつもりだ？ こっちも報告する義務があつてな」 「スカウトですよ。レオさん。この前はすいませんでしたね。うちの若い衆がだらしない真似を」 「スカウトね。それで、ズバリ聞くが貴様らの狙いはなんだ？」 「いいでしょう。教えますよ。この大陸の支配です。絶対的な権力、金そんな類いですかね」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9950x/>

第2章 二話 荒野の絆

2011年10月29日16時24分発行